

全米女子スポーツをリードする テキサス大学(下) 小笠原悦子

IAWが持つユニークな部門である Performance Team の紹介をした。この部門は一九八七年に Randa Ryan を Director に充て作られた新しい部門である。この部門には大学の教職員や医者が含まれている。いろいろな方向からトップアスリートをサポートしようというものである。この Director は科学者、コーチそして選手のいろいろなギャップを埋めるような役目を果たしている。具体的には他の Performance Team のスタッフとともに女子トップアスリートの競技力向上に関する研究プロジェクトの実施、トレーナーたちと一緒に形態・体力測定を行ない、コーチたちへの報告書の作成、また、選手達への栄養に関するアドバイスも行なっている。彼女の場合はオリンピックチームのアシスタントコーチであった経験を生かし、

第三者的な立場から選手のカウンセラーの役目も果たし、いろいろな選手が毎日彼女を訪れている。さらに修士課程において生理学を修めた彼女が今、博士論文にトライしているのは、この生理学、心理学、栄養学をミックスした内容だという。このポジションも理想

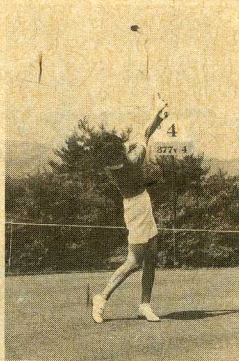
ではあるがなかなか難しい立場である。しかも何事も分化されて動くアメリカであるからこそ、このようなまとめ役(存在)が必要になってくるのだと思う。

以上のように学生選手をここまで管理できるこの組織のスタッフたちの努力に大変敬服するばかりである。コーチングスタッフは当然のことながら、これらの組織の事務的な仕事に従事する裏方としてのスタッフの重要性をここでもう一度確認したい。彼らがいるからこそ、社会が必要とするような学生選手としてバランスのとれた教育ができるのではないだろうか。このリポートを通じて、私自身が日本で感じてきた競技力向上のあり方はアメリカの考える競技力向上とは次元の違うものであったように感じている。また、実際にこのような大学生競技選手を支える理想的体制が存在することを知らずにきたこれまでの数年間で少々後悔しているほどである。(しかし、ここで特記しておかなければいけないことは、女子の組織としてはテキサス大学の IAW はアメリカの中でも特異な存在であるということである。)

◀ IAW 初の日本人選手

服部道子さん

◎ ゴルフダイジェスト



日本人として初めてこの IAW の選手としてゴルフの服部道子さんが今年(一九九一年)の5月に立派な成績でテキサス大学を卒業した。テキサス大学では Director の Dr. Lapiiano や Dr. Rice のオフィースには大きな彼女の写真が飾られ、彼らは誇らしげに彼女の大学での健闘ぶりを聞かせてくれた。現在の私は、彼女の存在や競泳選手達との毎日の接触の中で、日本でも大学の競技選手に関わる関係者たちの努力によっては彼女たちのような優秀な学業成績をもった学生選手の養成は十分に可能ではないか、と少々希望が湧いてきているところである。(「体育の科学」一九九一年十一月号より「おわり」)

◇ 三回にわたって紹介した米國 IAW (The University of Texas at Austin Intercollegiate Athletics for Woman) について、皆さんはどんな感想を持たれましたか。

筆者の小笠原さん(WSF ジャパン会員)は現在、鹿屋^{かのや}体育大学の講師として活躍されています。また、本文で再三、登場する「パワフル・ウーマン」と Dr. Donna Lapiiano は、今年四月から米國 WSF のエグゼクティブ・ディレクターに就任しました。「テキサス大学での十七年の経験を女性スポーツ発展のために生かしたい」と語っています。



▲米國 WSF の Executive Director に就任した Dr. Donna Lapiiano